

## ごあいさつ

実行委員会・委員長 皆川 健多郎（大阪工業大学）

フランク・ギルブレス（1868—1924 年）は、約 100 年前にレンガ積みの作業動作の分析（動作研究）からレンガをより速く簡単に積む方法を発見し、その方法は妻リリアン・ギルブレスとの共同研究に発展しました。「最良の方法(One Best Way)」を追求した彼らの研究成果は、多くの現場へと展開されていきました。佐々木章雄氏は、日本 IBM 勤務時、パソコン用ハードディスクの磁気ヘッドの目視検査において周辺視目視検査法を 1998 年に発見しています。意識することなく、変化に気づき、異常を発見するこの検査法は、動作研究をベースとした成果ともいえます。本研究は、さまざまな研究者によって研究が進められる中、公益社団法人精密工学会画像応用技術専門委員会に設置されたワーキンググループ「感察工学会（主査：石井明）」では、検査員の健康改善における定量評価ならびにその有効性に関する脳科学的理解の深化といった成果を得ています。

この偉大なる周辺視目視検査法の発見から 25 年となる節目の年に、25 年を振り返るとともに、これからの新たな展開について考える機会として「周辺視目視検査法誕生 25 周年シンポジウム～周辺視目視検査法の新たな展開～」と称してシンポジウムを開催する運びとなりました。生成 AI といった新たなデジタル技術が注目される中、動作研究をベースとして発見された周辺視目視検査法がどのように進化するのか、そして目視検査の現場をいかに救うのか、ご参加のみなさまとぜひとも討論をしたく、ご参加をお待ちします。